

入学式告辞

今日、晴れて入学の日を迎えられた皆さんに、名古屋外国語大学を代表して心からお祝いを申し上げます。また、今日、本学にお越しくださいました保護者の皆さまにも、改めて心より御礼申し上げます。

さて、今日から皆さんの新しい学び舎となる名古屋外国語大学は、今年二〇一八年に創立三十年の記念すべき年を迎えました。「三十にして立つ(而立)」という言葉をご存じでしょうか。私たちの大学は、今まさに長い成長期を終え、いよいよ本格的な「自立」の時代を迎えようとしています。飛行機になぞらえるならば、離陸から安定飛行の段階に入ったということができるでしょう。

しかし大学それ自体の「而立」にも増して大切なのは、本学に学ぶ学生一人ひとりが自らの「自立」を目指し、四年間の学びのなかでそれを現実のものとする事です。この三十周年を期に私たちが改めて心してかからなければならぬ教育の目標と使命もそこにあります。学長として、学部、学科を問わず、皆さんに寄せる期待は同じです。すなわち、日本のみならず、世界の人々から、「さすが名古屋外大生」とリス・ペクトされる「自立した」人間になつていただきたい。優れた批判的思考と豊かな共感力、この二つが原点です。そうした願いを込め、今日は、現代を生きるうえでの最も大切な心構えについて、私が日頃考えていることを披露したいと思います。

一、郷に入れば、郷に従え。(When in Rome, Do as the Romans do.)

私は、人生訓というのがとても好きでよく読みます。卒業式、入学式の前には、必ず一冊は手にして、こうした大切なセレモニーの心構えとするのです。最近、私はなぜか、この諺をつよく意識するようになりました。その歴史は古く、四世紀古代ローマの時代にまで遡るものとされています。ただしこれに類似した諺は、お隣の中国でも、「入郷而従郷、入俗而随俗」(ルーシヤアーツヨシヤン、ルーサーアーツオンスー)という諺で知られています。じつはこの中国の諺が、十四世紀南北朝時代の日本に入つて「郷に入れば、郷に従え」という諺として定着したのですね。まさに、世界普遍の知恵と言つてよいでしょう。では、その「知恵」が意味するものはどのようなものでしょうか。かりにこれを今日、めでたく入学を許可された皆さんに当てはめるなら、端的に次のようなことを意味することになります。すなわち、大学という郷、大学というコミュニティの一員になつたからには、大学の定めたルールにきちんと従つて勉学に励まなくてはならない。たしかにその通り。しかし、私が今日、あえてこの諺を引用したのは、ことさらそうした自明のことを伝えたいがためではありません。思うに、古来、人々は、この諺にさまざまの意味を重ねてきました。つい先ごろ読んだ、フィリップ・チェスターフィールド卿というイギリスの有名な教養人の本『わが息子よ、君はどう生きるか』(Letters to his Son)にその一例を発見することができました。チェスターフィールド卿は、ヨーロッパを旅する息子に向かつてその心構えを諄々と説いています。

「分別ある人間は、どこに行つてもその土地の風習を覚え、それに従おうとするものだ。世界中どこへ行つても、そうすることが必要だと思う。道徳的に許されないことでない限り、どんなことにも従つたほうがいい。その時いちばん役に立つのが順応力だ。一瞬のうちに、その場に見合った態度を決められる力だ」

卿は、ここで「順応力」の大切さを説きつつ、さらに次のように述べています。

「いろんな土地を訪れ、きちんとした人々につきあうことによつて、君は、その土地の人間と化すだろう。そうなれば、君はもはやイギリス人ではない。フランス人ではない。イタリア人でもない。ヨーロッパ人になるのだ。いろんな土地の良い風習を謙虚に取り入れ、パリではフランス人、ローマではイタリア人、そしてロンドンではイギリス人となるのだ」

「世界を旅して、ヨーロッパ人となる」——この言葉はとても示唆的です。現代のグローバル社会で活躍する人々のイメージが、十八世紀のイギリスの教養人においては「ヨーロッパ人」という言葉で集約されている。しかもここには、世界の人々と「共生」していくうえでの最も基本的な知恵がしっかりと述べられています。

しかし、私が今この諺に見るのは、このチェスターフィールド卿の考えとも少し異なっています。私が申し上げたいのは、端的に新しい世界との出会いの喜びに、「われを見失うな」ということです。外国語大学に学ぶ学生として、世界の諸地域で学ぶことができるのはとても素晴らしいことです。また、グローバル時代を生きるには、多少の危険も覚悟で、家族や故郷などのしがらみを脱し、世界に飛びだしていく勇氣が必要です。しかし、グローバル時代とは、じつは、皆さんが考える以上に異常な危険をはらんだ時代でもあるのです。ちよつとしたミス、ちよつとした奢りが、自分だけでなく、自分がその一員であるコミュニティ全体に取り返しつかない打撃をもたらしかねない。なぜならそこは、恐ろしいまでの相互監視の社会であり、ウエブの情報は、一瞬にして地の果てまで駆け巡るからです。そんな危険な時代を生きるうえで、何よりも必要とされるのがルール順守の精神であり、まさに冷静に世界と自分を見つめる力です。新しい世界との出会いは、たしかに喜びと興奮に満ちていますが、どんな状況にあつてもけつして冷静さを失わないこと、それこそ、グローバル時代における最も基本的な知性の証となるのです。

次に皆さんに伝えたいことがあります。

二、「よく学び、よく遊ぶ」(All work and no play makes Jack a dull boy.)

これもイギリスの諺ですね。もこの意味は、「勉強ばかりしてはつまらない人間にしかねない」の意味です。教養や良識を何より重んじるイギリス人らしい発想ですが、ここでいう「遊び」が意味しているのは、むしろ勉強の合間の息抜きではありません。

これから四年間、皆さんは、外国語の勉強を中心に忙しい時間を過ごすことになるでしょう。でも、外国語の勉強を、大学での「学び」のすべてと考えるはいけません。外国語の「学び」だけでは、けつして人々からリス・ペクトされる知性は持ちこたないからです。あえて「遊ぶ」こと、クリエイティブに「遊ぶ」技術を、「学ぶ」ことが大切なのです。

私は、「遊び」をこんなふうイメージし、定義したいと思っています。すなわち、皆さん一人ひとりがもっている個性(personality)と想像力(imagination)の力によつて世界と対話する時間、とつまり「遊び」とは、皆さんが、自分の頭脳と体力をバネにして行うクリエイティブな営みをいふのです。その意味で「遊び」とはすぐれて全人的であり、それこそ「学び」以上の「学び」、「学び」に君臨する「学び」の王といつてもよいのです。なにしろ「遊び」にこそ、皆さんが自分の力を発見する最大のきっかけが潜んでいるのですから。

そこで、最後の引用です。これは、私が常日頃、本学に学ぶ学生に向かつて言い聞かせている言葉です。

三、「外国語と、アートと、政治をしつかり学べば、世界はもう君のものだ」

外国語は、グローバルスタンダードである英語、プラスワンの外国語、これらの成果は、まさに集中的な「学び」によつて生みだされます。次にアート、これは、皆さんの「遊び」が生みだす「学び」を超えた「学び」の果実。では、「政治」はどうでしょうか。政治に関心をもち、皆さんが「学び」と「遊び」を超え、一人の人間として世界に向き合い、人類と自分の将来について考える時間を言います。「政治」には、世界の人々とどう共生していくか、という最重要の課題が含まれています。

以上、三つの言葉をつねに念頭に置きながら、実りある大学生活を送つてほしいと心から願つております。さて、私たち名古屋外国語大学のキャンパスは、日進の小高い丘の上に立っています。お隣では、私たちの姉妹校であるNUAS(名古屋学芸大学)の学生たちが学んでいます。今日から四年間、NUFS(名古屋外国語大学)のみならず、お隣のNUASの学生たちとも切磋琢磨し合いながら、充実した学生生活を送つてほしいと願っています。

そして最後に胸に刻んでおいてほしいことが一つ。今日から、名古屋外国語大学は、皆さんの人生にとつて、かけがえのない伴侶となるということ。皆さんのこれからの努力と将来における活躍によつて、私たちの大学それ自体の輝きと未来もまた、日々、更新されるといふこと、私たち教職員一同も、そのことを胸に刻みつつ、皆さんのよりよき学生生活のために全力を尽くす所存です。

以上をもつて、学長の告辞といたします。

二〇一八年四月二日

名古屋外国語大学長

亀山 郁夫